

悪性リンパ腫は、リンパ節原発が、主であるが、非ホジキン型では、節外性リンパ腫が、40.5%を占める。臓器別では、Waldeyer 輪、鼻粘膜、胃、腸であるが、乳腺に発生したものは、稀であると考え、若干の文献的考察を加えて報告する。

39. 広範囲熱傷患者の初期治療について

草間 昭夫・和田 寛治 (長岡赤十字病院)
小林 清男・山下 芳朗 (外科)
片柳 憲雄

広範囲熱傷の病態は複雑で、局所管理はもとより、体液、呼吸、循環の管理から栄養、感染防御に至る総合的管理が重要である。特に熱傷ショック離脱と離脱後の管理は急性期を乗り切る上で最も重要と思われる。

我々は、S. 56~S. 59, 10月までに受傷面積30%以上で全身管理を必要とした熱傷患者を22例経験した。年齢は1才~79才に渡り、60%以上の熱傷患者は8例であった。熱傷深度Ⅲ度で、気道熱傷を伴い、受傷面積が、60%と100%の2例は、それぞれ13日目と10日目に死亡したが、20例を救命する事が出来た。

気道熱傷を伴い、受傷面積98%で救命し得た一例を中心に、広範囲熱傷患者の初期治療についてのべると共に、当科における熱傷患者の治療方針についてのべる。

40. 食道癌術前栄養管理の重要性
—高度栄養障害例を中心に—

佐藤 信昭・佐藤 真
牧野 春彦・棚原 清
真部 一彦・若桑 隆二 (新潟大学第一外科)
川合 千尋・松原 要一
佐々木 公一・武藤 輝一

食道癌患者は初診時すでに低栄養状態にあるものが多く、手術に際し、術前より栄養改善を行うことは術後合併症の発生を予防する上で重要である。我々は低栄養症例では、術前に積極的に栄養管理を行っているが、今回は、栄養投与の効果のない症例の特徴を明らかにすべく検討を行った。1982年1月より1984年10月までの食道癌症例中、入院時に、罹患前に比し10%以上の体重減少、あるいは血清 Alb. が 3.5g/dl 以下の20例を対象とし、① 栄養管理法、投与カロリー、血漿製剤の有無、② 入院時と術直前における、各種栄養指標の比較、③ 術後合併症の発生率について検討した。

結果：① 血清 Alb. が上昇しない症例では67% (4/6例) に何らかの合併症が認められ、血清 Alb. が上昇せず、同時に体重増加を示した例では100% (3/3例) に合併症がみられた。② 栄養改善がみられない例では、50% (3/6例) で、癌腫の切除が不能であった。

41. 早期胃癌に合併した胃血管内皮腫の1例

黒崎 功・山本 睦生 (厚生連中央総合
金沢 信三・斎藤 聡郎 病院外科)
角原 昭文

症例は75才男性で、胃粘膜下腫瘍の診断にて開腹。悪性腫瘍も疑い胃全摘、R₂-OP を行った。術後の病理診断で血管内皮腫の診断をうけた。更に切除口側断端に粘膜癌あり、再開腹にて胃全摘、脾合併切除を行った。まれな疾患である胃血管内皮腫について文献的考察を加え報告いたします。

42. GRANULAR CELL TUMOR OF THE ESOPHAGUS A REPORT OF TWO CASES

Domingos S. de S. COUTINHO,
Tokihiko YOSHIKAWA,
Kaoru MIYASHITA,
Otsuo TANAKA,
Koichi SASAKI and Terukazu MUTO
(The First Dept. of Surgery, Niigata)
(University School of Medical

Jun SOGA
(Coll. of Biomedical Technology,
University of Niigata)

Takeaki SHIMIZU
(Shinrakuen Hospital, Niigata)

Case 1: A 54-year-old male.

The patient was asymptomatic. During a mass screening esophagogram a filling defect was found in the lower esophagus. The endoscopy and biopsy revealed a submucosal tumor that was diagnosed as a granular cell tumor (GCT). He underwent a left thoracotomy and the tumor was locally excised, which was yellowish white and measuring 2×1×1.3cm.

Case 2: A 51-year-old male.

On the investigation of the cause of tarry stools, the esophagogram and endoscopy disclosed a submucosal tumor in the lower esophagus that was preoperatively diagnosed as a GCT. He was treated with local excision of the tumor, measuring 1.3×1.0×1.0cm in size, through a left thoracotomy. Both patients were discharged after uneventful postoperative courses.

GCT are rare and show malignant changes in 3.6% of the reported cases. They were first described by Abrikossoff in 1926, as "granular cell myoblastomas". Later works based on the ultrast-

ructural findings of electron microscopy and in histochemistry strongly suggested that they are originated from the Schwann cells or from mesenchymal fibroblast-like cells.

43. 局所切除後3年で近傍粘膜に再発した食道癌偽肉腫の一例

丸山 明則・高野 征雄 (秋田赤十字病院)
山際 岩雄・川島 吉人 (外科)
武田 信夫

症例は72才男性で、嚥下困難を主訴として来院。内視鏡にて門歯列より30cmに3×2cm大の山田Ⅳ型ポリープあり、生検にて Severe dysplasia の診断、上皮内癌の可能性大と考え経胸的に周囲正常粘膜も含め局所切除を行った。内視鏡的 follow up 中術後3年目に前回手術部瘢痕近傍に山田Ⅲ型の腫瘤を認め、生検結果は前回と同様であった。局所再発と考え、blunt dissection を施行したが、瘢痕と腫瘤には連続性はなかった。切除標本の病理所見では2回共扁平上皮癌は上皮癌病巣と肉腫状の間質が混在し、移行を思わせる像を認めたことから癌偽肉腫と診断された。

癌偽肉腫の概念は1957年 Stout らにより提唱されたが、本邦における報告は少なく稀な疾患と考えられる。そこで本症例の臨床経過と、特徴的病理所見及び肉眼所見を供覧し、文献の考察を加え、初回手術の術式選択に対する反省も含めた治療法についても言及する予定である。

44. 食道早期癌・表在癌の治療経験

斎藤 寿一・三浦二三夫 (斎藤胃腸病院)
新井 英樹・勝木 茂美
藤巻 雅夫 (富山医科薬科大学第二外科)

当院における3例の食道早期癌と非開胸・食道抜去術のため表在癌となった1例の計4例について検討を加えた。その診断においては、食道 X 線検査では表在陥凹型、表在平坦型では診断に困難な場合が多かったが、内視鏡検査および直視下生検が有用であった。カルセル擦過細胞診では4例中1例に陽性であった。食道癌の臨床成績の向上には早期癌の発見が重要であり、そのためには食道集検の採用とともに、内視鏡検査において Panendoscope を用いる機会があれば、特に抜去時の慎重な食道観察と色素法の併用が極めて必要と考えられた。

45. 昭和54年6月よりの4年間に当科で経験した進行胃癌44例の実態と予後について

本間正一郎・高橋 辰弥 (県立六日町病院) 外科

過去4年間(昭和54年6月～58年5月)に当科で手術した胃癌53例のうち進行胃癌(pm 癌以上)44例につき検討した(昭和59年7月現在)。

① 症例の過半は70才以上(26/44)、年齢階層別生存例は70才台が最多(9/14)、再発生存例の半数(2/4)は70才以下であった。従って70才以下で無再発生存例(1年2ヶ月以上)は3例である。

② 初回入院時死亡例は6例(胃切2例、非胃切4例)でこのうち4例は80才以上であった。

③ この期間原病と無関係の再手術例は初回入院時では入院死亡の2例(術後腹水試験開腹1例、BⅡ法十二指腸断端縫合不全1例)とその以後ではイレウス併発の2例のみであった。

④ 死亡30例の死因は脳卒中1例、心不全兼肺炎1例以外再発死であった。

⑤ 再発型式は云わば局所再発的で減黄術、人工肛門造設などの再開腹や非選択的持続動注療法などの余地があり、近年そのような症例が増加している。その他、入院期間、術後管理、術後 MFC 療法なども検討した。

46. 過去4年間の甲状腺癌の手術経験

佐野 宗明・深川 茂
田島 健三・加藤 清 (新潟県立ガン
センター外科)
佐々木寿英・島田 寛治
赤井 貞彦

昭和55年12月より59年11月末までの4年間に、当科で手術が行われた甲状腺疾患は良性90例、悪性74例の164例であった。悪性疾患は未分化癌、髓様癌、悪性リンパ腫それぞれ2例をふくむが、大半は乳頭、濾胞腺癌の分化癌であった。しかし、その中で前縦隔リンパ節郭清6例、咽・喉頭・食道・甲状腺全摘1例、開胸2例などの進行例が多かった。これらは全て病悩期間が長く、初診時経過観察された例、手術を受けても系統的リンパ節郭清を受けていない再発例が16例あった。当科でも、術前良性の診断の手術例のなかに5例組織診断で悪性例があった。分化癌の遺残は長期間再発しないため安易に考えられやすいが、加齢とともに低分化になり、局所あるいは遠隔に再発する。そして侵襲大な手術、あるいは¹³¹I 内照射療法など行われても、根治性に確信が持てない状態になる。今回の症例をまとめた結果、初回手術の重要性が示唆され報告する。